

「平成 21 年度 北陸ブロック大豆現地検討会」を開催しました！



北陸産大豆振興協議会では、平成 21 年 9 月 28 日（月）に富山市にて「北陸ブロック大豆現地検討会」を開催しました。当日は、行政関係者、試験研究機関、普及指導機関、生産者、生産者団体等 70 名を超える参加がありました。開催にあたってご協力いただいた皆様、またご参加いただいた皆様、どうもありがとうございました！

1. 室内検討会

【13:00～14:45 大沢野ウェルネスリゾートウインディ会議室にて】

(1) 中央農業総合研究センター大豆生産安定研究チーム 島田 信二 チーム長

「大豆の安定生産と土壌水分管理について」

・大豆の安定多収には根粒の窒素固定能力を最大限に発揮させることが大切であり、そのためには土壌水分と酸素の供給の調節が重要となる。

・土壌有機物投入による団粒構造の発達や地下からの給水等により、土壌水分の供給と土壌中への酸素拡散の両立は可能であり、地下からの灌水は根粒へ水分と酸素の供給の両立を図る上で好適と考えられる。

・近年、排水機能と地下からの灌水機能を併せ持ち、地下水位を自由に設定できる地下水位制御システム（以下、FOEAS）が開発された。

・FOEASの利点として、作業性の向上（降雨後のより速やかな作業開始）、土壌水分の調整による出芽・苗立ちの向上と根粒窒素固定量の向上、増収効果が認められている。

・ただしFOEASの効果は土壌の種類で異なるため、導入を検討する際には土壌種類を考慮する必要がある。



【島田チーム長】

(2) 中央農業総合研究センター北陸水田輪作研究チーム 細川 寿 チーム長

「耕うん同時畝立て密植栽培技術について」

・発芽時・生育時の湿害回避、発芽時の乾燥害回避、碎土率向上（土塊を小さく）、降雨リスク回避・作業効率向上を目的として、これまでにホルダー型アップカットロータリによる耕うん同時畝立て播種技術を開発。この技術により、地下水位の低下、土壌水分の低下、土中酸素濃度の維持が図られ、増収効果が認められている。

・麦後大豆のように播種時期が遅くなる場合や地力低下等により、通常栽培では条間を覆うほどの生育ができず、収量が低下する場合がある。また中耕培土時期が梅雨に相当する栽培では、十分に中耕できないこともある。そこで、播種条間を狭くした「耕うん同時畝立て密植栽培技術」の検討を行った。



【細川チーム長】

・ 耕うん同時畝立て密植栽培技術では、条間が狭いため大豆は早く地表面を覆い、雑草発生の抑制が期待できる。また、中耕培土の省略により作業の省力化の可能性もある。ただし、主茎長が長くなりやすいため、倒伏程度が大きいという問題がある。倒伏程度が小さい条件下で収量の増加する割合が高くなるデータが得られている。

・ 今後の課題としては、倒伏しにくい品種の選定（北陸の主要品種であるエンレイは倒伏しやすい）、播種時期や播種密度等の導入条件の策定、除草体系の確立が挙げられる。

(3) 中央農業総合研究センター北陸水田輪作研究チーム 大野 智史 主任研究員

「田畑輪換体系に伴う窒素肥沃度の低下について」

・ 北陸地域の気象・土壌の特徴としては、年降水量が多く、特に11～3月にかけて顕著であること、湿性の強い強グライ土が発達・生成していることが挙げられる。

・ 大豆作における窒素収支は負となる。大豆の作付けは、圃場から窒素を持ち出すことになり、土壌中の窒素を減少させる一因である。

・ 窒素供給量が大豆の生育に及ぼす影響については、窒素供給量の低下が大きいと、莢数、百粒重が減少し、子実重が減少する。また、生育後半の窒素供給が減少すると、百粒重が減少する。



【大野主任研究員】



【講演を聴く参加者】

2, 現地圃場視察

【15:10～16:00 富山市東大久保の試験圃場にて】

(1) 耕うん同時畝立て密植栽培技術実証圃場（品種：「エンレイ」「東山213号」）

説明者：中央農業総合研究センター北陸水田輪作研究チーム 細川 寿 チーム長

富山農林振興センター農業普及第1課富山南部班 鍋島 学 班長

(2) 不耕起密植栽培技術実証圃場（品種：「エンレイ」）

説明者：富山農林振興センター農業普及第1課富山南部班 野見山 誉 普及指導員



【各処理区について説明】



【各処理区を観察する参加者】



【収穫間近の大豆】